

ゆえ、長女である私がかかりました。

毎日が不安と恐怖

東京都 山内弘子

満州国奉天省蓋平（ガイヘイ）という所に居住していました。小さな街でした。農園が多く、リンゴ栽培には適した土地、気候に恵まれていました。父は若いときに大陸に渡り、この土地に根をおろし、リンゴの木を広大な土地に植えたのです。たいへんに苦勞をして育てたそうです。

戦争が始まってからは、リンゴは軍におさえられ、自由で販売することもできなかつたのです。当時、私は女学生でした。

二十年八月十五日、思いもよらぬ無条件降伏、終戦の詔勅にただただ啞然、ぼう然とするばかり。泣き出す人、くやしがる人、皆の姿もさまざま、戦争には勝つとばかり信じていた私達、なぜ最後まで戦わないかと思つた。

敗戦ときまつたその日から、手のひらを返すように中国人達が変わつた。

日本人は一文無しで満州にきたのだから、裸で帰れ、と口汚くののしる者もいた。十八日頃からソ連軍、八路軍、中央軍と入れかわり立ちかわりはいつてきて、そのつど軍票がかわつた。

治安はなかなか落ちつかず、毎日デマがとび、日本人が殺されたなどと聞く。民家の家に土足であがり、自動小銃を持って目ぼしい物を取り上げて行く。女、子どもはおどかさされ、泣き叫び、助けを求める。でもどうすることもできない。敗戦のみじめさ、まさに生き地獄。

なぜこのような悲惨な日にあわなければならぬのでしょうか。母は私の身を案じ、夜も眠れず、天井や床下に私を隠した。通過部隊が通るたび、一日何回も土足であがられたのです。母は思いきつて私の髪の毛を切り、断髪して、男の服を着用させた。顔には鍋ズミをぬり、真つ黒な顔をして、男女の区別がつかぬようにしたのです。

ある日、ソ連司令官の館でパーティーが開かれるの

で、女を数人出せと要求があった。民会長は困り、有志達と相談のうえ、お金を集め、大連まで、酌婦を求めに行ったのです。母は私の着物、帯等を提供しました。娘の危険をしのいだのです。毎日が不安と恐怖の生活でした。なにごとかあったときは親子四人で青酸カリを飲んで死ぬ覚悟だった。夜がくると、満人達が夜襲をして、石を投げたり、窓ガラスを破ったりした。

ソ連軍がしりぞき、八路军がはいってきたら、日本人が集まったら暴動を起こすからといって一か村に一世帯ずつに分散させられました。私達親子は、山奥の村へ連れて行かれたのです。日本人の顔を見ることはなく、約半年以上生活した。そのうち日本人引揚げの命令があり、元の町へ帰り、あき家へ一時入居した。内地に帰るのだと皆は頑張った。出発は九月十三日だった。リュックサックの中身の検査があり、女の袋に男物が入っていたら没収された。一台車に四世帯ぐらい乗り、奉天へと向った。自分の家の前を通るときには涙が出て、父が二度と再び帰ることはないからよく目に入れておきなさいといった。

途中、不安な気持ちで検問をくぐりぬけ、二日後に奉天收容所に到着し、二、三日滞在して錦州へと向かい、馬小屋の中に入れられ、收容された。

一週間ぐらい滞在して、いよいよ私達蓋平組がコロ島へ向かい、乗船する日がきました。乗船時にまた検査があり、米軍にナイフ、凶器等を持っていないかと検査された。貨物船の船底に入り、二泊三日ぐらいかかり、本土が見えてきたよ……と人声が聞える。上陸が博多港でした。ほっとしました。初めての日本の土と、そのときの炊き出しのおにぎりの味、今でも忘れません。おいしかったです。DDTを頭からかけられ、真っ白になり、その夜、何か月ぶりにお風呂にはいり、あかを落としました。父の故郷丸亀へと帰郷しました。親子バラバラにならないで帰還できたことを奇跡と思う。